

東西経済大臣会合 こぼれ話

畠山 襄 *Noboru Hatakeyama*

(一財) 国際貿易投資研究所 顧問

本誌114号では、当時の駐日エジプト大使が拙画の一つを評価して下さったことや、ドイツ経済省の高級官僚ショメロス氏の絵画に対する造詣の深さの一端に触れた。そこで本号では、そのショメロス氏の際のない性格を遺憾なく語るエピソードに触れることにしよう。因みにショメロス氏は、2018年9月16日に85歳で逝去された。

1992年、ドイツのミュンスターで「東西経済大臣会合」が開かれた。メンバーは西側がG7、すなわち日・独・米・英・仏・伊・加、東側がロシア、カザフスタン、ウクライナ、ベラルーシ、ハンガリー、チェコスロバキア、ポーランドの7か国である。1989年11月にベルリンの壁が崩壊して以降、東側の国々は計画経済から市場経済に移行しつつあり、この閣僚会議に東側の経済閣僚を加えて各国主要企業の首脳にも出席してもらい、東側の市場経済への転換の動きを支援することは世界経済全体の発展に寄与するのではないか、というのが提案者、すなわち日本の考えであった。

にもかかわらず、第1回会合が日本でなく、西ドイツのミュンスターで行われたのにはそれなりの理由があった。私の提案が日本の窓口を出なかった、つまり他ならぬ日本の外務省に反対されたからだ。反対の理由は外務省の権益を侵すという狭い了見に基づくものであったようだ。

一般的に日本は国際的な提案能力が低いと言われる。しかし、これは外務省がごく狭い権益を基に、他の役所が行う国際的な提案に全て反対することに拠るところが大きい。かつての国際労働大臣会合も然りだ。本来は時の労

働大臣近藤鉄雄氏が提案したのものだが、外務省の反対でボツになり日本政府の案とはならなかった。後に、国際労働大臣会合は別の国の提案で実現した。

当時、西ドイツにメレマンと云う野心満々の経済大臣がいた。ショメロス次官の上司である。そのメレマン大臣がショメロス氏を通じて、「東西経済大臣会合の第一回会合を日本でやらないなら、自分の所、すなわちミュンスターで実施するが、それなら日本として異存はないか」と問い合わせてきた。ミュンスターは、その昔ウェストファリア条約が初めての国際条約として1648年に調印されたことで、その筋の者には有名であった。

日本としては、元来この構想に反対しているのは日本の外務省のみという状況下で、折角の日本の構想を恰も西ドイツの構想であるかの如く国際的に取り扱われるのは遺憾であると思いつつも受け入れた。

ショメロス氏によれば、「その代り2回目の会合は日本で開催ということに内定しておき、自分が行う閉会の挨拶の中でその話に触れるから、貴方は間髪を入れずに受諾演説をしてほしい。そうすれば日本が2回目の会合を実施することが明確になるし、曖昧になっているこの『東西経済大臣会合』の継続性の話も明確になるから、日本にとっても悪くない話だ」というのだ。

この話からも容易にわかるように、ショメロス氏は、日本の大蔵官僚が有能なやり手を評するときなどに好んで使う「ワル（悪）」なのだ。悪の悪たるゆえんは、大勢の各国代表を前にして、主催者の少なくとも片割れである私が引き受けたという既成事実があるのに、それをひっくり返す右胆力がある人物が会場内にいるかいないか、と読み切ってこのシナリオを描いたに違いない。

こうして第1回東西経済大臣会合がドイツのミュンスターで盛大に開かれた。日本からの出席者は渡部恒三通商産業大臣の他に、通商産業省の本件担当官であった私などであった。会合自体は順調に進み、無事終了した。しかし、後に一部の人が「生卵事件」と呼ぶ出来事が起きた。それは、現地の外国人嫌いの勢力と当時選挙期間中であった反メレマンの勢力とがない交ぜとなり、会合の出席者に生卵が投げつけられた事件であった。具体的には、投

げつけられた卵の一発目は肥塚大臣秘書官の胸に命中し、もう一発は私の座席に炸裂した。

日本代表団一行は、生卵が投げられた事件の警備責任を追及するため、ドイツの事務的責任者であるショメロス氏のところへ詰め寄った。これに対するショメロス氏のコメントはただ一つ。

「その生卵は新鮮だったかね。それとも腐っていたかね？」

日本側の誰かが答えた。「腐ってはいなかった」

するとショメロス氏は言った。「それは良かった」

それ以上、主催者としての警備の手ばかりについての謝罪はなかった。ショメロス氏にしてみれば、海千山千の14か国の間で揉まれているのだから生卵がごときで余り騒ぐな、ということであったかもしれない。